味村　實　鈴木しづゑ　伊藤こまゝ
石井　朝　石橋きく　中條ユウ
田中くに　中川たけ　武藤ヨネ
村瀨久子　山口小靜　松原チエ
正木むら　赤木多木代　鹽井勝子
關　ふよ

善　子

何時の間にか私は心の中で唱歌して居た。
それは、よく、ふいと心に浮んで來る節であるけれど、その曲名は思ひ出さなかつた。同じ事をくりかへしくりかへし、何心なく幾丁か來たのである。
來て後に、あゝ自分は今迄歌をうたつて居たのだと、思つた。

飛行機

晶　子

あれあれ通る飛行機
　今日も巴里をすぢかひに
風切る音をふるはせて
　身輕なこなし高々と
羽をひろげたよい形

ガベラ眼鏡を目にあてゝ
　空を踏まへた膽太の
若い乘手を見上ぐれば
　少し捻つた機體から
きらと反射の金が散る

若い乘手のいさましさ
　後ろを見捨て死を忘れ
片時やまぬあたらしい
　力となつて飛んで行く
前へ未來へましぐらに

研究

目次

地理參考書

第一回

日本地理の部

一、帝國大地誌 野口保興氏著 定價貳、五圓

本書は初め中等程度諸學校生徒に、帝國地理の梗概を示す目的を以て、編纂したるものを、訂正增補したるものにて八百三十二頁の大冊子、內容は帝國概說、本領土、拓植地の三篇より成る。

二、大日本地誌集成 矢澤昌永氏著 定價壹、八圓

自然地理、人文地理の關係の說明を親密にし、且趣味的に記載し、各地方誌の終りには必ず研究の方法を指示し以て敎授上の指針とせり、殊に材料の精選拾捨に心を籠め、將來我が國民の盡力すべき產業、有望なる都邑の如きは筆紙を惜しまず說明せり。

三、大日本帝國地誌通論 小林房太郎氏著 定價四、五圓

著者は東京地學協會にて研究を積めり、本書の內容は地理學發達史、地文地理通論、人文地理通論、自然と人文との關係、各種總計表等の五部に分れ、上下合せて一〇七四頁、優秀なる參考書なり。

四、最新日本地理資料 井原儀氏著 定價壹、參五圓

中等程度の學校及び小學校地理敎授資料に供せんが爲めに、編纂したるものにて番號及び圈點により地理學上の重要事項を示し、或は一覽表を挿入せる點は本書の特色なり。

五、最近統合帝國地理敎授資料 山上萬次郎氏著 定價

大正四年版、最近異動の事實を蒐集し、基本根定の材料を提出して敎授者の參考に供するもの、悉く最近の調査に準據せり。

六、大日本地誌十册 山崎直方氏 佐藤傳藏氏編 各定價貳、五圓等 參、〇

先づ地表自然の形勢を寫し、更に人爲の地理的現象に論及し、地文人文の關係を說明す、日本地理中最も詳細なるものにて關東、奧羽、中部近畿、北陸、中國、四國、九州、北海道、琉球及臺灣の十卷に分る。

七、最新大日本地理 上下 角田政治氏編 定價貳、五圓

日本地理としてはオーソリティーだらう、自然と人事との聯絡、小學敎科書との連絡、各府縣の生產力、富力、各府縣の富豪、人情風俗の異同、產業產物の盛衰、都邑の盛衰消長、名所舊蹟、

研究上の注意等の點に十分力を注いで居る。

八、**續最新大日本地理集成上下** 角田政治氏編 定價各貳、五圓

本書は最新大日本地理集成の體裁に學びて、交通及び名勝の部を、最新の調査に依りて編纂したるもの、主として趣味的方面を詳述す、大正五年十二月發行。

九、**日本地理研究**

本書は明治三十七年より大正三年に至る、十一ヶ年間の諸官立學校入學試驗問題中、日本地理の部を蒐集し、其の解答を加へたるものなり。

十、**其の他** 各地を特に詳細に研究する爲めには植民地大鑑、樺太案内、樺太要覽、樺太地誌、朝鮮事情要覽、朝鮮の研究、朝鮮新地理、臺灣等あり、其の總督府出版物は必ず參考するの必要あり。

外國地理の部

一、**帝國通信講習會 外國地理** 山上萬次郎氏 明治三十一年

文科講義

日本綴の小冊子なり、外國地理の教程につきて、本邦に遠きものより初め、漸次近きに及ぼし最も關係深き隣邦諸國を最後に最も詳しく論ず、なほ人文地理方誌とも併せ說く。

二、**外國地理綱要、外國地理表解** 同三十七年及卅八年

両書ともにポケット用小冊子。中等學校に於ける外國地理科の豫習用復習用の目的をもて、一般地理的方面及文學的歷史的趣味を加へて表解をこゝろむ。

三、**外國地理講義** 池田夏苗氏 明治四十年

本書は受驗用として自然地理の事實を書く歷史上の事項と聯絡せしめむとて、未だそれに及ばず。

四、**地理學叢話** 木村小舟氏 明治四十一年

神保小虎博士の旅行せられたる時の見聞記事なり。卷中挿入寫眞多し、ジャバ、ボルネオ等は南洋の寶庫たるを、邦人のこれに著目する者少きを慨し、これらの地方の材料を多く集む。

五、**外國地理集成** 角田政治氏 明治四十四年

日露戰爭當時の國民の狀態をみ、地理は現在の活動をかたりて、愛國心を敎ふとの見地よりし

自然と人事、動的狀態と靜的狀態との聯絡を、有機的に說明せむと試む、特に研究上の要點を章末に擧げたるは、他書に見ざる所なり。

六、**外國地理講義** 明治中學會編 明治四十四年

中等程度の範圍内にて、外國地理全般を詳解したるもの。言文一致にして讀み易く、中學程度の生徒の好伴侶たり。

七、**自然人文世界大地理** 吉田賴吉 武居芳成 依田豊 共編

本書は歐米斯界の新潮を汲み、材料の正確を期すると共に、一方趣味あり生氣あらむとす、一般家庭の地理的知識の普及上進を希圖せるより通俗的に解し易し。

八、**最新地理要報** 野口保興氏 大正二年

最近にあらはれし事實を、中心として記述せるもの、地理汎論と地理特論とに分ち、特論に於いて世界地理帝國地理をとく。

九、**參考資料最近世界地理** 井原儀 大正六年三月

讀者の便ならむため、又地理學上の事實の要點を迅速に、且つ明瞭に會得せしむるを主眼となすため、概括的系統的記載法による、地理學上の事實と他の諸學科との聯絡を保たんとし、產業は國家富强の要素とみて、比較的詳細に挿畫も多し。

天文學の部

地理學通論の全部に亘つての解題は、餘り廣すぎますので、今號には不完全乍ら天文と氣象とに關する物丈に止めて置きました、なほ連續する積りです。

一、**大略天學名目鈔** 西川忠次郎正休氏 享保己酉仲冬書于武江

こういふ古い物も擧げて見ました、こういふ本から今の本に目を移した時に、驚かずには居られません。

卷首天學初學問答に「聖人の道は格物を始とし萬物の理を窮むる事、天地の理を窮むるより大なるはなし、天學には命理の天學、形氣の天學あり、性命五常の道は上者、日月五星の運行、邦國山川の地理をはかるは後者なり、堯舜位を得て上者を實行して世を治め、孔子は位を得ざりし故に命理の天學を行ひしのみ。

戰國には臆說出でしも世治るや、異端の說皆天象曆度に合はざる故に、獨り堯舜の大流のみ元

明、當今に至りて增々精致を極む、紅毛のよく航するは寶を得ん爲なり、吾には天文を以て道德性命の理を極め、オランダは天學を以て、不仁貪慾の理を極む、形氣の天學に達して何ぞ命理の天學に達せざる」云々と、こんな主義である。

內容、初學のために天學の名目を知しめんためにて、九天、左旋右旋、赤道、黃道、地平、大地五帶並に五大洲、日月蝕、陽曆陰曆、等を擧ぐ。

二、星　經　漢甘公石甲、子之英閎、享保十五年十一月、

これも東洋哲學的に、主意は前者と同樣と見ました、星の名をあげて下に圖を示し、これに說明が加へてあります。例へば、

哭。一。

哭二星東虛南主死哭之事、

三、天文圖說　尾田玄古纂　正德三年頃

序に「地は天の內に在り、天は鷄子の如く地は內の黃なるが如し、」云々の言あり。

日月麗天之圖、黃赤道の圖、九道の圖、日月蝕夏至、冬至、晦朔弦望、中星、堯典四仲中星圖等を說明して合計二十九枚。

四、初學天文指南

序に「天學は元、明を經て大に精となり、耶律、文正公王文肅公恂等の功多きも漢文にて難解なれば和文となして初學に示す」と、（寶永三年孤山居士）

地球（天の半は地上を被ひ、半は地下に有り、と）曆、方角、測驗、里數、星體等を說く、なほ前者の樣であります。

五、渾天新語（乾坤の二冊）　正六位上行主計助越智宿彌通禮等　文化元年六月

「古の人天文を治めて政をよくせり、今地動の說を蘭書に得しも、なほ渾天の理を原とす、なほ西書によりて曆象推則の、至要なる物を選びのせ、圖を擧げて諸學に便にす」と。

天地、經緯、方角、日月、蝕、五星、赤經緯度表等につきて論ず。

六、視實等象儀詳說　佐田介石撰　明治十三年三月

「天地の大を如何にして知らむ、これ眼に依るに非ずして心に依る也」と、二十八宮の所以、晝

夜、日月等すべて問答體に記してある、けれ共尙未だ附會な事が多い。

七、日用新舊曆の栞　曆術研究會編　人文社發行　大正三年六月二十八日

曆に關する知識の普及を、計るために作つたもので、潮汐の事、季節の事、各地の溫度霜雪の季節等は、各職業者の便に資するため、比校的委しくかいてある、曆の基礎、太陽曆、太陰曆、季節、雜節、雜類等に分けて書いてある、雜節の說明等は物足りないが、大體の事丈を知るために世俗の人によいと思ふ、あつさは二分五厘位の小冊子で、大正四年度の豫言曆などものつてをる。

八、神宮略本曆解　中倉祺氏氏著　乙卯出版部發行　大正四年十一月　定價五圓

全體として曆の解といふよりは神官らしい、又その方面の事が、多すぎはしないかと思はれないでもない。

始に明治天皇御製と昭憲皇太后の御歌とを載せ奉り、次に神宮、宮中三敎の事を說いてある、そして一篇には、曆の種類、沿革、年號、日月蝕、季節等の事、二篇では祝祭日、官社例祭（十二ヶ月に分けて）三篇は雜說、月名の由來、迷信、年中行事で、附錄として神祇に關する皇室諸令、神社祭祀及歷史に關する諸令をのせてある。

著者の意は、略本曆に解を加へ趣味を增さしめ國民思想を養ひて、一般國民をして所生の羅針盤たらしめ樣とするにあるのである、確に參考にはなるけれ共、あらゆる宗敎をおとしめ、又一見辭書の如く、神社に關する事が非常に澤山かいてある。

九、趣味の天文　理學博士一戸直藏著　大正五年五月二十五日　現代文科學社發行　定價壹圓貳拾錢

元來明治四十三年『星』と題して出版したものを全部大に削正して、その內容に應じて『趣味の天文』と改めたものである、吾人が日夜望み得る天究に關して、その趣味の深いことは勿論であるが、この著は其趣味を解すべき素養を與へるもの、主として著者自身の經驗を基として時に普通の行方と異る點が、あるがそれだけ讀んで面白い、目次は、天空に於ける星辰の運動、星のヌペクトル、星の等級、附星の數、變光星、新

星、星雲と星團、重星及連星、北の天空二、黄道帶及其傍近の星座、南半球の天、南極近傍の天、銀河、太陽等の以上十四章で二百二十五頁程のものだが、實際趣味がある、殊に所々に引用されてゐる古今東西の詩歌が、如何に古代の人たちが天空に關して、注意深い眼を向けてゐたかと云ふことを思はせる。

十、宇宙發展論 瑞典ドクトルアレニウス著 一戸直藏譯 定價壹圓八拾錢 大正三年九月十四日 大倉書店發行

原名は Das Werden der Welten. と云ふ、譯者曰く『宇宙開闢史』の姉妹篇たらしめんと、火山現象と地震、地球内部の狀態、生物の住所としての天體(特に地球)太陽の輻射及其構造、輻射壓地球大氣中に於ける太陽の細塵、極光及地磁氣の變化、太陽の滅亡――星雲の起源、星雲狀態と太陽狀態、生命の宇宙擴布、及附錄として天體の分布に就いて云つてゐる、三百六十頁許のものである、宇宙の進化に關する問題が常に思索家の深い興味を喚起しながら、各時代を經來つた今日、更に十九世紀の終末竝びに二十世紀の門口を飾る、物理學竝びに化學の偉大な發達に一致することを、切望して著はされたのである。

十一、天文學講話 理學博士横山又次郎氏著 大正三年八月二十五日改訂發行 早稲田大學出版部 定價壹圓參拾錢

著者の目的とする所は、史學專修者に天體に關する智識の梗概を授けると云ふのであるが、普通一般の天文理學である、その史學專修者にと云つてゐるのも、或は餘り專門的になつてしまはないで、素直に述べてある所以であろう、初學者のいゝ參考書である。

十二、通俗講話天文學 一戸直藏著 大正二年九月二十日 現代文科學社發行 定價壹圓八拾錢

普通學の一般を修めた人、又は科學に特別の趣味を有する人士に、解し易く天文學を說いてある、學說ばかりでなく、實例を多く擧げてあるのが前者より通俗的である、或は同時に、種々實地の試みも覺えられる點に於て、前者に優つてゐるとも云はれる。

氣象學の部

一、雨 理學博士岡田武松著 大正五年十月十四日 丸善株式會社發行 定價壹圓五拾錢

記述を丁寧にして、氣象學專門家のみならず、

農事、林業、土木等の事業に從事する人士や、地理、物理、その他氣象に關係ある學科を修める人の爲に參考書としてある、內容は雨、雪、雹、霰、凍雨、雨氷、霧氷、露、霜、降水量等で三六〇頁程ある、學說の外に豐富な事實と實驗とが讀者をして興味あらしめる、一般の人の讀物としても面白い物であらう。

二、氣象學講話 岡田武松著 大正五年三月八日 東京國文社發行 定價壹圓參拾錢

著者の實地の經驗によつて、氣象學の大要を示して居る、實業學校講習所に用ふべき程度で、一般初學の人にもわかり易くかいてある、實用に近く天候避害等も悉しく述べてある、卷末には多少學理を主として述べてあるから、氣象學事業に從事する人の階梯とすることも出來る。

三、氣象學 馬場信倫著 大正元年九月十四日 明昇舍發行 定價貳圓六拾錢

通俗的で數理論には重きをおいて居らぬ、主に航海者に讀ましむべき目的で著したもので、海上の現象、海に干繫ある事柄より、船舶との關係を特に精く述べてあるが、多少の素養ある人の氣界、地理の參考書としてよい本である、卑近をとつて多く日本に於ける事實について、說明してゐる。

四、氣象觀測法 中央氣象臺 大日本氣象會發行

實地に觀測する方法を述べてゐる、露場の選定測器の精査、觀測の回數と時刻、水蒸氣張力及濕度算出法、氣候、空氣溫度、風、降水量、雲日照、蒸發量、地中溫度、參考氣象器械等について器械の說明と、觀測の方法を主として述べてある。

五、氣象集誌 大日本氣象學會 定價參拾錢

氣象に關係する論說報告等を記載してゐる、去る五月十日發行のものは、論說報文に、航空と氣象、水平量に就て、極東に於ける氣象相關の調査等、寄書通信に、筑波山蒸發計內の氷柱及其生成の解說、月光觀測に就ての注意等記してある。

□ □ □